

小関隆著

## 『アイルランド革命 一九一三—二二』

——第一次世界大戦と二つの国家の誕生——

八 谷 舞

本書は、第一次世界大戦の勃発（一九一三年）からアイルランド自由国の発足（一九二三年）までの十年を取り上げ、その間のアイルランドにおける政治的動乱を一種の「革命」と捉えて論じるものである。

本書の構成は次の通りである。

序章 アイルランド革命とは？

第一章 第一次世界大戦

第二章 イースター蜂起

第三章 独立戦争

第四章 内戦

終章 アイルランド革命の帰結

章構成から明らかな通り、本書では第一次世界大戦をアイルランド革命の「起点」として重視する。ただし、序章の前に置かれたプロローグは、アイルランドの南アフリカ戦争の体験に注目している。南アフリカ戦争はイギリスが行った大義なき帝国主義政策の典型例と考えられて内外世論の批判を浴びており、アイルランドの共和主義者たちは「イングリランドの苦境はアイルランドの

好機」をスローガンにこれを独立の好機とせよと煽動した。この南アフリカ戦争当時、本書の三人の登場人物、ウィリー・レドモンド（アイルランド国民党首ジョン・レドモンドの弟）、ロジャー・ケイスメント、アースキン・チルダーズのうち、ケイスメントはイギリス外務省領事であり、またイギリス議会議院の書記官であったチルダーズはロンドン市帝國義勇軍の一員であった。彼ら三人はこの時点では立場も信条も異にしており、互いに面識もなかったが、南アフリカ戦争の体験は三人の思想に大きく影響することになる。

序章「アイルランド革命とは？」では、この時期のアイルランドの政治的動乱を著者が革命と評する理由が説明されたのち、革命にいたるまでの概略が示される。アイルランドは大戦の勝利国による統治から暴力的手法によって脱し、主権を獲得した。著者がこの時期の動乱を総称して革命と呼ぶのは、これらの特徴による（なおこの革命の時期は本書で四つに区分されており、それぞれが各章に対応する）。さらに、この革命の一連の流れは常に大戦との連関の中で把握すべきと説明される。

イギリスの長い支配体制のもとで、多数派の要求は独立よりもむしろ自治の拡大であった。ただし、これは支配／被支配の単純な二項対立で考えられるものではない。アイルランドは常に、「帝国植民地に対しては宗主国でありながら自らもイギリスからは植民地的な処遇を受ける、という二面性」（七頁）を持ち続けていた。これに対して、イギリスからの分離独立を目指す「急進派」は長く少数派であり続けてきた。多数派が主導した議会主義的ナショナルリズムは、十九世紀後半にはイギリス議会でキャステ

イング・ポートを握るほどの勢力にまで成長する。また自由党は党首グラッドストンの肝煎りにより、アイルランド問題を解決すべく三度（一八八六年、一八九三年、一九一二年）にわたってアイルランド自治法案を提出するなど、自治拡大の悲願は実現に大きく近づいたかと思われた。しかし三度目の自治法案に対し、アルスターを拠点とするユニオニストが強硬に反対したことが、現在まで続くアイルランドの南北分割の端緒となる。

また、アイルランド革命を説明する上での重要な特徴である「軍事化」は、アルスターで生まれたパラミリタリであるアルスター義勇軍に対抗すべく、もう一つのパラミリタリであるアイルランド義勇軍が南部で結成されたことよって急激に進展した。これを著者は、「議論を通じた合意形成と妥協を重んじるイギリス型のリベラルな政治文化とは異なる政治文化の台頭」につながったと解釈する。これらの前提条件を踏まえた上で、本書の登場人物である前述の三人、ウィリー、ケイスメント、チルダーズについてのより詳細な紹介がなされる。

第一章「第一次世界大戦」では、アイルランド革命の起点としての第一次世界大戦がアイルランドの視点から詳述される。ヨーロッパ全土が未曾有の大戦に突入しようとする時、イギリスはアイルランド問題から内戦状態に突入しようとしていた。その中で、アイルランド側が「戦争協力という賭け」に踏み切ったことは、イギリスにとつては僥倖であり、さらにドイツやオーストリアが抱いていたイギリス内紛の期待を打ち砕くものでもあった。これによって一時はイギリス側の態度も変わり、議会の改正も経て第三次自治法案は勅裁を受けるにいたるものの、大戦終結後まで

自治は棚上げとなる。

アイルランド国民党による戦争協力の方針は、議会主義的ナショナルリズムが世論の支持を失い、代わって革命的ナショナルリズムが勢力を拡大するきっかけとなったと結果論的に解釈されることが多い。しかしここで著者は、当時は戦争協力の方針が理にかなったものであったということ強調する。イギリスを含む連合国側に味方するということには、ドイツ帝国主義を打倒するという大義があった。それは南アフリカ戦争の時とは全く異なる事情であった。さらに、非常時にあたってユニオニストとナショナルリズムが共闘することにより、内部の紛争状態が解決されるという樂觀的な見通しも持たれていた。急進派ナショナルリストたちは反戦・反イギリスを唱えて抵抗したが、彼らは少数にとどまった。

南アフリカ戦争と同様第一次大戦においても、ウィリー、チルダーズ、ケイスメントはそれぞれ別の立場で関わることとなる。ウィリーは兄ジョン・レドモンドによる戦争協力の政策を自ら遂行するような形でイギリス軍に従軍する。チルダーズもまた海軍士官として従軍するが、ケイスメントは敵国ドイツとの連携を企て、大逆罪で逮捕・処刑される。そして第一次大戦は当初の予想に反して長期化し、厭戦気分も相俟ってアイルランド国民党は支持を失ってゆく。

第二章「イースター蜂起」では、大戦終了間近に発生したイースター蜂起の衝撃が果たした役割について詳述される。イースター蜂起は勝ち目のない無策な反乱と批判されることもあるが、本書ではイースター蜂起のパフォーマティブな側面が強調される。共和主義者たちにとって、「イングランドの苦境」たる大戦の最

中に行動を起こさないという選択肢はないに等しく、また宗教的含意を考へてもイースターの時期は最適と考へられたのである。またこの蜂起は、アイルランドのナショナルリズムが自治主義から共和主義へと転換する重要な契機となった。南北が和解し平和裏に自治を拡大するというアイルランド国民党の悲願は、分断と暴力という真逆の選択肢に取って代わられることとなる。蜂起の首謀者たちが杜撰な軍法会議によって処刑される姿は、人々の同情と共感を喚起した。イースター蜂起とその事後処理は帝国内にも大きな影響を及ぼした上、アメリカとの関係にも影響する。ここで蜂起軍の一員であったデ・ヴァレラがアメリカ生まれの出自によって処刑を免れ釈放されたことは、のちに大きな意味を持つこととなる。

イギリス軍として第一次大戦の戦線に立つ兵士たちにとって、この蜂起は愛国心の発露というよりは少数の共和主義者たちが起こした暴発であり、自治拡大に水を差す利敵行為であると受け取られた。圧倒的に不利な状況下で、ウィリーは従軍経験者として遊説し募兵を行うが効果は芳しくなく、やがて戦場に戻ったウィリーは戦死し、兄レドモンドも急死する。自治拡大を旨とする議会主義的ナショナルリズムは、象徴的な二人の死をもって終焉を迎えることとなる。

第三章「独立戦争」では、第一次大戦が終結したのちに世界中で散発した「戦後の戦争」の一つとして独立戦争を描く。独立宣言、民主綱領、世界の自由な諸国民へのメッセージ、国民議会憲法といった一連の重要な文書が採択され、国民議会政府が発足し、新たな政体が始動した。「新政府」はバリ講和会議での国際的承

認を期待したが、予想に反してウィルソンがイギリスとの協調を重んじたため、事態は難航する。その一方で、国内では独立戦争が始まる。独立戦争はイギリス・アイルランド双方のパラミタリによって戦われた戦争であった。この戦争はやがてゲリラ戦へと発展し、軍事化はさらに加速する。また、イギリスとアイルランドの間にある圧倒的な軍事力の差を埋めるために行われたプロバガンダ戦において、チルダーズが活躍する。チルダーズは、イギリスは大戦中には小国の自決権尊重を標榜しつつ、戦後にはアイルランドの自決権を蹂躪していると国際世論にアピールした。これはアイルランド内部において、その出自や経歴から「イギリスのスパイ」と目されがちなチルダーズ自身がなんとか信用を得るための努力でもあった。のちに、イギリスの治安維持勢力による武力行使は小国アイルランドへの報復行為であるとしてイギリス内部においても批判の声が高まる。エスカレートする戦闘が収まりそうにないことを受け、ようやくイギリスは和平交渉へと踏み出すが、ここで交わされた講和条約の内容が、アイルランド国内にまた新たな火種を提供することとなる。

第四章「内戦」では、前章の講和条約に対する賛成派と反対派の間で戦われた内戦が描かれる。講和条約ではアイルランドは「自由国」としての地位を認められ、またイギリス国王への忠誠宣誓が求められることになっていたが、何であれ「共和国」を放棄する可能性を伴う条約に調印すべきでないとする反対派と、妥協案であるとしても現実主義的観点から調印すべきであるとする賛成派にアイルランドは二分される。本書の主要登場人物の最後の一人となってしまったチルダーズは反対派側に立ち、ついにこ

の内戦の中で逮捕され、「二重の背信者」として処刑される。アイルランド人の母を持ちアイルランドで生まれ育ちながらも、反対勢力からは常に「忌まわしいイングラント人」とのレッテルを貼られ続けたチルダーズは、中立的であることを許されず、宗派も政治的立場も常に「どちらか」を選ばなければならなかったこの時期のアイルランド人を象徴するような存在である。なお本章では軍法会議におけるチルダーズの陳述が趣旨ごとに整理されており、著者のチルダーズへのひとかたならぬ思い入れを感じさせるものとなっている。両軍による報復合戦は凄惨さを増し、休戦によって一応の収束を見た。内戦はまた南北アイルランドの分割を固定化したのが、一方で北アイルランドが「内戦によって救われた」と評している部分は興味深い。終章で改めて触れられるが、このとき北部で棚上げにされた宗派対立や党派対立が一九六〇年代以降の北アイルランド紛争の素地を作ることとなる。

終章「アイルランド革命の帰結」では、流血に流血を重ねて達成されたアイルランドの独立がその後どのような形で結実したかが説明される。政治的暴力は封じ込められ、内戦時の条約反対派を中核とするフィーナ・フォイルと、条約賛成派に由来するクマン・ナ・ゲール（のち他党派と合流してフィネ・ゲールとなる）から成る二大政党制が形作られる。イギリスからの自立を念願し続けて成立した新国家がイギリス式の政党政治を行うようになるというのはなんとも皮肉なことである。

革命がもたらしたものとして、著者は望まれぬ帰結としての南北分割、経済・社会分野での革命が達成されなかったこと、共和国が獲得されなかったことを挙げつつ、あらゆる意味でアイルラ

ンド革命は「未完の革命」であり、第一次大戦の文脈なくして革命をとらえることは不可能であること、さらに革命において政治の「軍事化」が決定的な役割を果たしたことを再確認する。エピソードでは、本書の登場人物三名の死後の評価が描かれる。ウィリー以外の二人、ケイスメントとチルダーズは汚名を着せられて屈辱的な死を迎えたが、のちにケイスメントもチルダーズもその名誉を回復される。

以上が本書の内容となる。この時代を取り上げること自体は、アイルランド近現代史研究においてはそう目新しいことではない。代表的なものを取り上げると、まずセニア・パセタは *Before the Revolution*（一九九九年）において、アイルランドにおけるカトリック・エリートへの動向に着目し、一八七九年から一九二二年をひとつの区切りとして描き出す。ウーナ・ウォルシュは *Ireland's Independence*（二〇〇一年）において、一八八〇年から一九二三年を区切る。ロイ・フォスターは *Vivid Faces*（二〇一四年）において、一八九〇年から一九二三年を取り上げている。これらを見れば明らか通り、十九世紀末頃にはすでに革命的な帰結を招く素地が作られていたと考える解釈が主流であり、わずか十年をもって「アイルランド革命」と見なす本書の解釈は大胆とも言える。歴史研究にあたっては、淵源をより古くまで遡る方が易しく、短い期間で区切るには相当の勇氣と正当性が必要となるからである。

また、ここで大胆というのは、一見するところ本書の時代区分はオールド・ファクションなものとも感じられるからである。アイルランド史において、長く学界の主流であったナショナルリスト

史観は、アイルランド史をイングリランドとの闘争の歴史と認識する目的史観であり、アイルランド史の帰結は当然イギリスからの独立であった。またそこで焦点が当てられたのは政治史であったため、第一次世界大戦におけるイギリスへの戦争協力方針においてアイルランド国民党が決定的に人心を失い、革命的勢力が取って代わって武力闘争の末に独立へいたるまでの道筋は新興国たるアイルランドの「建国の神話」を正当化するものとして切り取られた。しかし一九六〇年代以降、上記のナシヨナリスト史観がIRAのテロリズムを正当化する理論的支柱として用いられたことを受け、学界はこの行為を学問的見地から否定する必要性に迫られた。その結果、ナシヨナリスト史観へのアンチテーゼとして生まれたのが修正主義史観である。修正主義史観においては過去との断絶よりも連続性を重視するアプローチが採られ、また政治史偏重型の歴史叙述も見直された。上記のフォスターはいわば修正主義史観の旗手の一人であり、その後多くの歴史家がこの修正主義史観の立場から研究成果を発表してきた。この点で言えば、本書の時代区分はナシヨナリスト史家たちのそれに近いと言つてよい。アイルランド史においてナシヨナリスト史観的な解釈がほぼ見直されたに等しい昨今、敢えて政治史に基づいた時代区分を適用する本書は紛れもなく大胆である。

ただし、第一次大戦の影響は多くの修正主義史家が指摘してきたところではあるが、第一次大戦の文脈をここまで前面に押し出して二十世紀初頭にアイルランドが経験した政治的動乱を説明した研究は他に類を見ない。また、ケイスメント、ウィリー、チルダーズの三人の登場人物を軸に革命を描いていく手法により、本

書は内容の専門性を担保しつつ、読み物としても楽しめるものとなつている。この時期の政治的動乱を描くにあたり、この三人の人は選んで誰が見ても納得する類のものではないが、デ・ヴァレラやピアースといった著名な指導者ではなく敢えてこの三人が登場人物に選ばれた理由はあとがきにある通り、「大戦が彼らの人生を決定的に転換させ、革命とのかかわり方を大きく左右した」という共通点にある。特に、汚名を着せられ失意のうちに没したケイスメントとチルダーズが取り上げられている意義は、「記念・追悼の十年（二〇一二―二〇二二年）」の一環として彼らの名誉が回復された潮流に鑑みて、決して小さいものではない。そして何より、革命をイギリス支配からの輝かしい勝利としてではなく、「未完」のものとして理解し、またその負の側面にも十分に着目している点は、本書が偏狭なナシヨナリスト史観に陥っていないことを明白に示していると言えよう。

以上のような意義を認めつつ、本書を批判しうる点としては、次の三点が挙げられる。

まず、階級の視点が欠如していることについて。アイルランド一国史的に考えれば、この革命は、それまでガラスの天井によって社会的上昇を阻まれていたカトリックの下層ミドルクラスが、従来の支配層であったプロテスタントのアングロ・アイリッシュを駆逐したという、階級闘争的な側面を持つことにも留意しなければならぬ。本書でも「均質化」については言及されているが、これは自由国時代に国民を苦しめるまでの保守性として発露することとなる。自由国時代、倫理面での指導および監視を担ったカトリック聖職者はほとんどが農家や下層ミドルクラスの出身であ

つたように、革命を経て社会を統制する集団の宗派だけでなく、階級も明らかに転換した。後世との連続性を考える上で、この転換は非常に重要な意味を持つはずである。

次に、物理的な暴力性だけでなく、精神的な尖鋭化にも着目する必要がある。本書では議論の骨子を明確に示すためにおそらく意図的に除外してあるのだろうが、やはり十九世紀半ば頃から武力蜂起の前には必ず見え隠れしていた文化的ナシヨナリズムの動きに言及されていないのは些か不自然に思える。この革命の前にも、十九世紀後半頃から、イエイツやレディ・グレゴリーらが主導した文芸復興運動、自由国の初代大統領となるハイドやマクニール、ピアースが主導したアイルランド語復興運動、さらにキユーザックが主導したゲール体育協会によるアイルランド独自のスポーツの復興運動を三本柱とする文化復興運動が起こっていた。この文化復興運動がマッチョイズムを醸成し、軍事化に多少なりとも影響を及ぼした側面は否定できないだろう。特にゲリーツク・リーグやゲール体育協会と、本書が重視するパラミリタリのメンバーとは大きく重複している。つまり、文化的な背景を語らずして、この革命を説明することは不可能と言えるだろう。そしてそのことを考えれば、やはり本書の時代区分は適切かという問題に立ち返ることとなる。

また、「革命世代」の人物たちの濃密な人間関係について、もう少し踏み込んだ解説も必要であったのではないだろうか。パセタおよびフォスターの著作に詳しいように、十九世紀末頃のアイランドに満ちていた宗派対立の影響は革命世代の人間関係をより密にしたと言える。また、長年にわたってナシヨナリストイッ

クな運動が繰り返られる中で、何度かの「世代交代」が経験されていることもきわめて重要である。濃密な人間関係の中で醸成された世代ごとの心性の違いが、一世代前であれば決して望みえなかったような帰結につながったとも考えることができる。先述した通り、修正主義の隆盛以降、アイルランド近現代史は連続性をもって理解されるのが通例となっているが、その中で起こった断絶にもやはり留意しなければならない。

同じ歴史的事象を扱うとしても、著者の関心がどこにあるかによって時代区分の方法や描き方は大きく異なる。独立前後のアイランド史の叙述はその好例であると言ってよい。あとがきにある通り、本書はアイルランド史やイギリス史の専門家ではない読者をも想定し、「手に取りやす」く、また「さほど苦勞せず革命の経緯と全体像が掴める」ものを目指している。その目的において本書は見事に成功しているものの、やはりこの革命の発端においてどこに求めるか、どのように時代を区切るかという点においては、今後も歴史家の数だけ答えがあるといった類のものとなるだろう。本書によって、この時代を扱う研究蓄積がまた厚くなったことを喜ばしく思うとともに、今後ともさらなる活発な議論が行われることを期待したい。

- ① アイルランド史学史をめぐる論争について、詳しくは勝田俊輔『共同体の記憶』と『修正主義の歴史学』—新しいアイルランド史像の構築に向けて—『史学雑誌』一〇七編九号、八十一—九十五頁、一九九八年を参照。

- ② 政治的ナシヨナリズムと文化的ナシヨナリズムの関係について、代表的なものとしてはJohn Hutchinson, *The Dynamics of Cultural*

*Nationalism : The Gaelic Revival and the Creation of the Irish Nation State.* Allen and Unwin, Boston, 1987 文参照。

(四六判 三六〇頁 二〇一八年四月)

岩波書店 三三〇〇円＋税)

(日本学術振興会特別研究員PD)